

大学生の対人恐怖心性に関する研究

－自己受容性と自己超越性との関連から－

山 根 理

1. 問題と目的

本研究の目的は、大学生を対象として、対人恐怖心性を中心に自己受容性と自己超越性との関連を検討するところにある。わが国には、特徴的な神経症として対人恐怖症というものがある。さらに、病態としての対人恐怖症が多ばかりでなく、日本人の心性そのものが対人恐怖の心性を孕んでいるとも言われている（笠原・稲浪、1968）。大学生においても同様の傾向は見られ、堀井（2005）が、大学生の人間関係のあり方を特徴付けるものとして対人恐怖心性を挙げている。このような現状を見るとき、対人恐怖心性を持つ大学生に対する心理臨床的援助は急務であると言える。

2. 方法

各項目の測定には、対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井、2006）、自己受容性測定スケール（宮沢、1980）、日本語版 PIL テスト（岡堂、1993）を使用した。調査は 2007 年 11 月～12 月にかけて、大阪府内の某私立大学の大学生を対象に個人配布で行った。このうち、回答不備を除く計 415 名（平均年齢 19.73 歳：男子 209 名、女子 206 名）を分析対象とした。

3. 結果と考察

各尺度に因子分析を行った。その結果、対人恐怖心性尺度Ⅱからは「孤立・親密恐怖」「劣等恐怖」「自己視線・醜形恐怖」「被害恐怖」「加害恐怖」の 5 因子が抽出され、自己受容性測定スケールからは「自己価値」「自己承認」「自己信頼」「自己理解」「自己責任」の 5 因子が抽出された。PIL テストからは「自己超越性」の 1 因子が抽出された。

次に、各尺度の下位尺度間の相関を検討した。その結果、対人恐怖心性の高い人は、自己受容性が低く、自己超越性も低いということが示唆された。つまり、対人恐怖心性の高い人は、対人関係において自分自身が恐怖の対象であり、自分自身のことが受容できていないということ、および、自分のコンプレックスや自分自身にとらわれている傾向があるということが示された。この結果は、大学生が「自己受容性」「自己超越性」という観点から自分を見つめなおすことによって、対人恐怖心性の苦悩の解決の糸口を見出す手助けとなるものであろう。また、家族や第三者が、対人恐怖心性の高い学生に対して関わりを持つ際にも、同様に、「自己受容性」と「自己超越性」という観点を意識することの意義を示唆したものである。彼らの「自己受容性」と「自己超越性」の低さというものを想定し、それらを高めることを意識に入れながら関わるのが、対人恐怖心性で苦しむ学生の苦悩を解決するきっかけとなると思われる。